

ウラীনフー——書き終えて、好きになった男

楊海英

拙著『中国とモンゴルのはざま——ウラীনフーの実らなかつた民族自決の夢』を岩波書店が二〇一三年から発刊しはじめた「岩波現代全書」の一つに加えていただき、このほど書店に並んだ。ウラীনフー（一九〇六—八八）という国際共産主義者の波乱万丈の生涯の一部を描いたものである。

ナシヨナリズムを軸に彼の思想と実践を「自決期」と「自治期」、「抵抗期」と「破滅期」という四段階に分けて描写した。ウラীনフーは中国に対して民族の自決権の行使を求め、中華民主連邦を創りたかつたが、与えられたのは自治だった。彼は本物の自治を実現しようとして、中国人すなわち漢族と闘い、抵抗し、そして肅清され

て破滅した、という流れである。国際共産主義者兼モンゴル人ナシヨナリストのウラীনフーの思想と、毛沢東ら中国人社会主義者との相克に重点を置いたので、面白いエピソードを多数、割愛してしまった。ここでそのうちのいくつかを紹介したい。

留学先での空白

ウラীনフーは南モンゴルの西部、中国人農民の侵略を早くから受けていた地域の出身だ。中国による植民地支配を打破しようとして、モンゴル人の民族主義の政党、内モンゴル人民革命党に一九二五年秋に入った。入党した直後に、同党から派遣されてソ連に留学した。弱冠、一九歳の時だった。

彼はモスクワに四年間滞在し、ロシア語が抜群にうまくなっていた。私は彼の人生のなかのモスクワ期を「求道」時代と表現したが、実態はまったく把握できていない。彼に関する膨大な資料群のなかで、モスクワ滞在期については、中国では何ひとつ公表されていないからだ。これは、資料の公開を渋る中国政府に原因があるというよりも、そもそも資料らしい資料がないと予想している。すべて、モスクワのコミンテルン関連のアーカイブに秘蔵されているだろう。そして、もう一つの資料宝庫はウラীনバートルだ。一九二四年に成立したばかりのモンゴル人民共和国はコミンテルンとともに、南モンゴルに住む同胞たちを解放しようという目標を掲げて、内モンゴル人民革命党の創立に関わっていた。青年ウラীনフーはソ連に本部をおくコミンテルンとモンゴル人民共和国主導の下で、

モンゴル人を中国の抑圧から解放する運動に身を投じていた。当然、彼の青年期の資料も中国には残っていないのである。

ウラシソフは一九二九年にコミンテルンの「世界革命」の指令を帯びて南モンゴルに帰郷した。

その際にロシア語の『資本論』を一冊、大切に持っていた。ときどき、内モンゴル自治区の首府フフホト市にある「ウラシソフ記念館」で展示されるが、ぼろぼろになつてしまつたのは、彼がマルクスの大著を片時も身から離さずに読みこんでいたためだといふ。中国において、諸民族は「自治」と奮闘した彼の思想的な源泉は、ロシア語で書かれた共産主義の典籍内にあつたのである。

### 結婚生活

「弱冠、一九歳」とソ連留学に旅立つたウラシソフを私はこの

ように表現した。弱冠でも、彼はすでに三歳の女の子と、一歳の男の子の父親になつていた。中国の資料は彼がいづ結婚したかなどの私生活に関する情報を一切、伝えていない。計算してみると、ウラシソフは遅くとも一五歳の時に結婚しているはずだ。妻の名は雲亭で、同郷のモンゴル人だつた。長女の名は雲曙碧で、長男は

グヘといふ。グヘとは「力士」との意で、モンゴルらしい名前だ。モスクワから帰郷したウラシソフは、中華民国の軍閥、傅作義と一〇年間に親しく付き合つてから、一九三九年にようやく共産党の割拠地、延安に入る。遅々として共産党陣営に行かなかつたのも、モスクワの指示があつたからであるう。この時期、スターリンはまだ田舎出身の毛沢東よりも、

蔣介石の国民政府を支援していたからである。ウラシソフは一九四五年に日本が大陸から撤退するまで延安で暮らした。この間に、彼は雲麗文という美女と同棲するようになる。雲麗文は彼の長女、雲曙碧と同じ年で、一六歳年下だつた。ウラシソフが延安に行く際に、同郷のモンゴル人青少年たちを数十人も連れていた。このなかに雲麗文もいた。少女雲麗文と雲曙碧は、親しい間柄だつた。

親友と恋に落ちた父親のウラシソフを娘の雲曙碧はどのように見ていたのだろうか。この時期の延安では糟糠の妻を捨てて、知的で若い都會育ちの女性と結婚するブームが起つていた。先頭に立つていたのはほかでもない毛沢東だ。苦難をともにしてきた妻の一人、賀子珍と別れて、上海で風流の名を轟かせていた女優江青と結婚した艶聞は広く知られている。モンゴル人のウラシソフもこのブームに乗つたかどうかは不明だが、性におおらかなモンゴル

人の觀念もあつたかもしれない。ウライソフーは結局、雲亭と離婚したか否か、雲麗文と正式に結婚の手續きを取つたかどうか、謎のままである。ただ、彼は最後まで、二人の女性の面倒をよくみていたのである。

### モンゴル語の名前

ウライソフーがウライソフーになる前に、雲澤と呼ばれていた。

いつ、どこで、何のためにウライソフーと名乗るようになったかも、正式の記録はまだ公表されて

いない。今日のモンゴル人たちはだいたい、一九四七年五月一日

に、内モンゴル自治政府が旧滿洲国の興安綏省の省都王爺廟で成立した際に、「雲澤がウライソフーに生まれ変わった」と見ている。

ウライソフーとは「赤い息子」との意だ。彼の肝いりで創設された内モンゴル自治政府の首都の名もこの時期に王爺廟から「ウライソ

ホト」に改名した。こちらは「赤い都」との意だ。同じ時期のソ連圏とその衛星国にはすでにウライソバートル(赤い英雄)がモンゴル人民共和国、ウライソウイド(赤い扉)がグリヤイト共和国、キズル(赤い町)がトクバ自治共和国、などの国々の首都の名にそれぞれ冠されていたのである。ウライソフーは、内モンゴル自治政府をきたるべき時期に出現するだろうと彼が夢想していた「中華民

主連邦」内の一共和国にしようとなつていたので、自分にも社会主義を具現した名を付けたのではないか。

別の説もある。レーニンの姓ウライソフーから取つたという。

レーニンもその母親はモンゴル系だったために、ウライソフーとの姓もモンゴル語の「ウライソフー(柳の意)に由来するといわれて

合体させたほど格好いい名前はない、と本人がそう考えたかもしれない。

ウライソフーの改名は成功した。モンゴル人に対しては、自分は真正正銘の共産主義者だといえ

たし、中国人たちに対しては、自らはマインリナイを代表する國際的な革命家だと宣言できたのである。中国人たちはもちろん、発音的にくい「烏蘭夫」よりも、中華風の雲澤を好んでいた。

### 燃えなかつた「余燼」

一九六六年五月に失脚させられたウライソフーは文化大革命中に

南国の湖南省長沙市近辺に幽閉されていたらと伝えられている。その十年間を彼が誰と、どういう風に過ごしたのかも、まったくわからない。ウライソフーの政敵である鄧小平も南国に流されている間は中小企業で働かされていたとの話があるが、モンゴル政治家の流

刑生活の詳細はまだ明るみに出ていない。

一九七七年あたりから少しずつ

復活し、最終的には国家副主席のポストを当てられても、南モンゴ

ルに帰郷することだけは許されな

かった。私は復活後の彼の活動期

を「余燼」と表現したが、モンゴ

ル人政治家の思想と活動の炎がモ

ンゴルの草原に燃え移ることに対

し、中国人たちは最後まで警戒を

緩めなかつたのである。だから、

彼はどんなに「高位」に上りつめ

ても、モンゴル人たちともにい

るのを中国政府は絶対に許さな

かつたのである。

以上のように、書かなくてカッ

トしてしまつたのは「美味しい

話」ばかりである。岩波書店編集

部副部長の馬場公彦さんはこんな

私を見て、次のような「編集部か

らのメッセージ」を発してくれた。

本書にはモンゴル人である楊き

んの思い入れや想像がウライン

フーという人物造形の重要な要

素となつている。とはいえ、そ

の基底には、膨大な一次資料が

ある。『内モンゴル自治区の文

化大革命——モンゴル人ジェノ

サイドに関する資料』（風響社

刊）というA4判で一冊が一〇

〇〇頁になんなんとするほどの

資料集をすでに五冊刊行し、い

づれ一〇冊まで刊行する予定で

ある。各冊の解説だけでもゆう

に一〇〇枚はある。徒手空拳で

広大な中国の大地からこれらの

資料を収集し、体系的な資料集

をまとめる才覚と執念は、並大

抵のものではない。ウライン

フーは、モンゴル人大量虐殺と

いう凄惨な悲劇の原因と結末を

一身で背負わされるような役回

りを演じさせられた。だが、誰

よりもモンゴルを愛し、民族主

義者として偉大なモンゴル人の

民族英雄であるチンギス・ハ

ンの足跡を追い求め、「第二の

チンギス・ハーン」になろうと

した。本書から、自伝もまと

まつた証言も残さなかつたウ

ラインフーの内面の真実の声を

聞く思いがある。

(http://www.iwawami.co.jp/moreinfo/

0291160/top.html)

馬場公彦さんに触発された私は

ふと思つた。私もほとんどのモン

ゴル人たちと同じように、実はウ

ラインフーが大好きだつたのだ。

彼が生きていたころは、「あいつ

は中国政府と中国人たちの傀儡

だ」と見ていた。彼が肅清されて

はじめて、ウラインフーがモンゴ

ル人のために獲得できていた「部

分的な自治権」はいかに大きかつ

たかを実感した。というのも、

今、その限られた自治権すら中国

政府と中国人たちにはば剥奪され

つくしたからである。

## 特集 ナジヨナリズムと歴史認識

### 対談

日韓朝のナジヨナリズム

グライアン・マイヤース×河辺二郎

### 論説

倒錯した幻想と日中の民衆対立 田島英一

日米保守派の歴史認識 河辺二郎

「暴力幻想」と悪循環

―安倍、イデオロギ―として日中関係の将来

アシコトノミヤ

国民を渴望する

―一九八〇～一九九〇年代台湾民族主義の文化政治

藤岡明

### 特別寄稿

莫言『酒国』を読む

―中国の「いま」を描くデモニク・リアリズム

張旭東

### 一般論説

光復後初期の台湾における文化再建

―楊逵の作品改訂を例として 豊田園子

紅衛兵世代における読書動向について

―文化大革命以前を中心に 中津俊樹

周超／村上亨／上野稔弘／好並晶／小笠原淳

楊艷／樋泉克夫／野崎哲／楊海英

